技術・家庭科（家庭科分野）における学び続ける子どもの育成

家庭科とは，生活そのものを取り扱う教科であるため，それぞれの場面が単独で存在するものではなく，複雑に相互作用し，様々な知識や技能の応用として成り立っている。また，家庭科はよりよく生きるための生活実践力を学ぶ教科でもあるため，その学習方法の適用については，学習内容を子どもが自分の問題としてとらえることができるような手立てが必要となる[1)]。そして，これからの社会を創造する子どもにとって，自らが主体となってその問題に取り組み，主体的に知識や技能などの能力を身につけるとともに，自らの活動を振り返ることによって，よりよくしながら前へと進む姿勢をもつことも非常に重要である。また，家庭科の授業では，子どもが主体的に学ぶための手段として，自己の生活においての課題をみつめ，学習したことを生活に生かす力を身につけるための工夫も必要とされている[2)]。そこで，本研究の家庭科分野においては，一人一人が問いをもち追求する姿を，生活の中の課題を多面的にとらえ，修得した技術を活用し自ら解決する姿としてとらえることをメインテーマとした。

小学校の公開授業研修会では，『自分にできる家庭の仕事を考えよう』の中で，夏休みに実践する仕事に対し，よりよく実践するために必要なことや調べていきたいことを考えさせる授業を行った。「家庭での夏休みの仕事」という家庭との関わりを強く意識できる課題設定にしたことで家族の一員として身近な生活を考え，家族の大切さを見つめ直すことにつながったと思われた。また，学級全体や小グループでの話し合いをする学習形態にしたことで，友達の意見や考え方を取り入れ，自分なりに「夏休みの仕事」に対する課題をいろいろな視点から見つけようとする姿も見られた。先生からの問いかけや児童間の話し合いの中で生まれた「問い」を追求する姿にもつながっていた。中学校では『自分の生活が身近な環境に与える影響を考えよう』を題材とし，遠足でカレーを作るという設定で，調理の際に出てくる汚れ，ゴミなどについて環境に与える影響を考えた。「環境」は非常に重要な課題ではあるものの，フードマイレージ，二酸化炭素排出量，エネルギー負荷量，水環境などの要素が多数ある中で，何と結びつけて考えさせるのか，また条件（範囲）設定をどこまでにするかで，授業内容や方向性が大きく変化する非常に難しい分野でもある。本授業では，「遠足でカレーを作る」という条件設定にした。生徒は２年生の遠足で，グループごとに飯ごう炊さんでカレー作りを経験しており，グループ間での話し合いの際，共通の体験をもとにスムーズに意見を出し合うことができていた。また，「環境」について事前にＤＶＤを使った授業を行い，さらに授業では「環境」の指標をエネルギーに限定し，よりよく理解するための資料提示を行ったことで，難しい「環境」の内容を身近なこととして捉え，問題解決に集中して取り組む姿が見られた。

家庭科での学習を実際の生活で継続的に活かす力を得るためには，生活を営む上で生じる課題について自ら判断して課題を解決できる問題解決能力が必要とされる。しかし，子どもを取り巻く社会環境はめまぐるしく変化し，家庭生活も多様化している。休日や放課後には習い事をしている子どもも多く，生活体験が不足している傾向にある。このような，生活体験の不足は家庭生活に対する意識，関心の低下につながると懸念される。家庭科の授業を通し，友達や家族などと情報交換したり，アドバイスを得ることは，子どもの家庭生活に対する意欲，関心の高まりにつながるものと考えられる。今後も家庭科の授業を通し，生活をよりよくするために，常に「問い」をもち，自分の知識や技能を最大限に生かし，問題を解決していく力を子どもたちに身につけさせたい。

（共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座，鶴永　陽子）

【参考文献等】
1）デミール千代・藤井志保・小林歩・伊藤圭子・望月てる代：新学習指導要領の下での授業実践，広島大学学部・附属学校共同研 究機構研究紀要，2014
2）多々納道子・福田公子編著：『教育実践力をつける家庭科教育法』，大学教育出版，2005.